

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13454

研究課題名(和文)現代中国語における程度表現のメカニズムに関する研究

研究課題名(英文)A study on the mechanism of degree expression in modern Chinese

研究代表者

前田 真砂美(MAEDA, Masami)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：00617342

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：現代中国語の普通話(標準語)において程度性が言語化されるメカニズムについて、程度副詞、程度補語がそれぞれ担う意味論的、語用論的機能の面から考察した。動詞からの文法化によって副詞用法を獲得した程度副詞(主に単音節副詞)が、動詞の基本義を利用して程度性認識のプロセスをなぞることで大小さまざまな程度性を言語化し表現しようとするのに対し、程度補語は程度が深まることしか示さず、“多”を用いた程度補語は、程度の高さが潜在的または顕在的に存在する比較参照を大きく引き離して高いことを述べるものであり、二者間の差を示す数量補語とは語用論的機能が異なるものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モノやデキゴトのような、ある程度の客観性が見込まれる物理的、外界的事実に対する言及に比べて多分に主観的、個人的である程度の高低的表出のメカニズムおよび語、形式の選択の動機づけを明らかにすることで、中国語という個別言語の研究分野だけでなく、言語の普遍性と個別性の観点から、言語類型論や対照研究の分野にも新たな視点を提供することができた。また、教学の面では、程度性以外の弁別的特徴を定義することで、程度性に係る語や形式が選択される動機づけを明確にすることができ、それらが用いられる場面設定を通して、直感的に理解しやすい説明が可能となる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we considered the mechanism for verbalizing degree in modern standard Mandarin from the viewpoint of semantic and pragmatic function of degree adverbs and degree complements. The analysis elucidated the following:

1. Whereas degree adverbs that have acquired adverb usage by grammaticalization from verbs express various degrees by tracing the process of degree recognition using the meaning of verbs, degree complements only represent fairly high degree.
2. Degree complements have a different pragmatic function from quantitative complements which show the difference between two objects. Degree complements using “多” state that the degree is high, far apart from potential or explicit comparative reference.

研究分野：現代中国語文法

キーワード：現代中国語 程度性 副詞 補語 数量

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代中国語の普通話(標準語)において程度の高さや低さを表すには、形容詞(または形容詞的な語)に程度副詞を前置するか、程度補語を後置するという手段がある。しかし、程度副詞、程度補語には、その程度性がどれほどなのかが明確に定義できないものが多い。程度が高いのか、それほどでもないのか、低いのかコンテキストに左右されるものがあり、そのような語は多義語として扱われている。仮に、程度副詞、程度補語が程度性を自立的に、自明に表すものだという前提に立つならば、表される程度性が一定でないことは、程度副詞、程度補語の定義に大きな矛盾を孕むことになる。

程度性の定義が困難であるがゆえに、程度表現に用いられる語に対する関心は「どれくらいの程度を表すのか」「どの語がより高い程度を表すのか」といった点に集中しがちであり、従来の研究においても、程度性の高低という連続する尺度上のどの一点に各語を位置づけるかという点に主たる問題意識が置かれてきた。しかし実際には、程度の高低のみでは程度副詞や程度補語の特徴は捉えきれず、コンテキストによって程度性が左右される以上、すべての語を程度の高いものから低いものへと一列に並べることは不可能である。

本研究はこれらの点に問題意識をもち、程度副詞、程度補語が自立的、直接的に程度を表しているという前提を疑い、程度性以外の弁別の特徴を定義することで、程度副詞、程度補語の使用動機を明らかにしようとするものである。

### 2. 研究の目的

本研究は現代中国語の普通話(標準語)における程度表現を対象とし、当該言語が程度の高低を表出するメカニズムを明らかにすることを目的とする。程度を表すとされる語の個別の用法に関しては膨大な数の記述的研究があるものの、ではそれらの語からなぜ程度性の解釈が生じ得るのかという問いに、明快な回答を示した研究は管見の限り見当たらない。本研究では、程度を表すとされる語から程度性を捨象し、各語の意味を程度性とは別の文法的機能として定義する。その文法的機能から程度性が読み取れるに至る意味論的経緯を詳らかにすることで、各語が程度性そのものを直接的に表すのではないという新たな知見を提起する。

程度性を捨象するという本研究の切り口は、中国語母語話者が程度の高低を認識し、それを表現するにはどのような心的プロセスが存在するのか、そしてそれをどのように言語化しているのかという点を理解することにつながるものである。程度表現に用いられる語や形式による程度性の発現が何に由来するのかを究明することにより、個々の語、形式に対する核心的意味の定義づけを行い、それらの核心的意味が程度性の表出にどのように利用されているのかを究明する。モノやデキゴトのようなある程度の客観性が見込まれる物理的、外界の事実に対する言及、描写と比べると、程度の高低を述べることは多分に主観的、個人的である。そのような概念を中国語で表出するメカニズムを解明することは、中国語という個別言語の研究分野だけでなく、言語の普遍性と個別性の観点から、言語類型論や対照研究の分野にも資する研究成果となり得るものである。

### 3. 研究の方法

本研究は三ヶ年計画とし、以下の手順で研究を進める。

- (1) 程度副詞の文法化の経緯およびその核心的意味の定義づけを行う。
- (2) 程度補語の意味、用法の特徴を明らかにし、程度副詞による程度表現と程度補語による程度表現とを比較し、その共通性および特殊性を見出す。

上記(1)(2)については、具体的には以下の方法で考察する。

一次資料(小説等の出版物や電子テキスト)の収集、データベース化、用例分析。

より多くの程度副詞の用例を収集し、コーパスとして用例を随時検索し引き出せるようデータベース化する。より広範で詳細な分析のため、口語データも含めた様々なジャンルのテキストを視野に入れて用例収集を行う。

インフォマントに対する聞き取り調査。

収集した用例で用いられている程度副詞、程度補語について、インフォマントの語感を調査する。事前の調査では、程度副詞を含む一文だけを提示した場合と、前後の文脈も含めて提示した場合とでは、その程度副詞が他の語に置換可能か否かの判定が異なる場合があることがわかっている。文脈の有無で判定に差が出るという点は、程度副詞の考察において従来の研究に欠けていた視点であり、程度副詞の核心的意味を捉えるために極めて重要であるため、程度副詞の置換実験を通して、各程度副詞の特殊性の把握を試みる。

古代・上古・中古漢語に関する資料収集、用例分析。

本研究以前に行なった研究により、程度副詞の程度性発現には、副詞へと文法化する前のもとの字の原義が深く関わっており、程度副詞の意味を定義するには、その原義と現代中国語における程度副詞としての用法とを関連付けて記述することが欠かせないことが明らかとなっている。したがって、古代・上古・中古漢語における用例を年代を追って検証し、文法化の経緯を観察する。

結果補語構造、様態補語構造の分析。

程度補語は形容詞(的な語)に補語が後続する形式をとるが、これは動詞に補語が後続して動作の結果を表す結果補語や、様態を表す様態補語と同形式である。統語的構造を同じ

くする結果補語、様態補語の構文的、意味的特徴を把握し、程度補語による程度性表現の仕組みを解明する。中国語学における結果補語、様態補語に関する研究成果を整理する。程度副詞と程度補語との比較。

程度副詞と程度補語という二つの形式を比較し、程度副詞によって表現される程度性と、程度補語によって表現される程度性との共通性と特殊性を定義する。

- (3) 上記(1)、(2)の研究結果をふまえ、現代中国語における程度表現の特性の記述および程度性発現のメカニズムの理論化を行う。程度副詞、程度補語を含む文から程度性が読み取れる意味論的経緯を明らかにする。

#### 4. 研究成果

動詞からの文法化によって副詞用法を獲得した程度副詞（主に単音節副詞）が、動詞の基本義を利用して程度性認識のプロセスをなぞることで大小さまざまな程度性を言語化し表現しようとするのに対し、程度補語は程度が深まることしか示さず、語用論的機能も異なることを検証した。程度補語については、具体的に以下の点を考察した。

まず、現代中国語の普通話（標準語）において、二者間の差が比較的大きいことを示す手段として「形容詞 + “很多”（以下、A很多）」という形式の使用例が増えていることを取り上げ、この形式の現在における使用状況を記述するとともに、方言から流入したA很多が普通話において拡散してきた背景、および、A很多の使用動機について考察した。考察の結果、以下の三点を明らかにした。

- (1) A很多における“很多”は、統語的、語用論的にみて程度補語ではなく数量補語であること。
- (2) 普通話において、A很多以外に二者間の差そのものに言及する形式が少ないこと。
- (3) 普通話において差の大きさに言及する際に用いられる既存の表現形式として“A不少”“许多”が挙げられるが、これらにはいずれも独自の特徴があり、単に差の大きさのみを自由に表現するには不向きであって、このことがA很多の普通話における使用増加の要因のひとつとなっていること。

上記の考察により、新しい表現形式が生まれ定着していく際に、その背景に存在する外的な要因を検討するという視点と検討の方法について、ひとつのモデルケースを示すことができた。また、A很多が程度補語ではないことを検証する過程において、程度補語と数量補語の語用論的機能の違いを明確に区分することができ、程度補語によって表現される程度性を定義するための重要な知見を得られた。

次に、上記の考察過程において、数量フレーズと比較構文の共起関係についてより深く検証し整理しておく必要が生じたため、明示的比較構文に現れる数量フレーズを対象に、結果項が「形容詞 + 動詞」形式（A+V）である場合と「動詞 + “得” + 形容詞」形式（V得A）である場合、それぞれの場合の統語的振る舞いについて検証した。A+Vが結果項となる比較構文には数量フレーズの生起が必須となり、V得Aが結果項となる比較構文では逆に数量フレーズが排斥される。このことは言語事実としては従来から指摘があったものの、その理由について論じた先行研究は見られなかったため、この点について、A+V形式の語彙化や動作性、文の焦点の面から検証し、以下の点を明らかにした。

- (4) 形容詞が連用修飾語として動詞に前置される形式（= A+V）は通常、明示的比較構文とは共起しないが、形容詞“多”“早”の場合は具体的な数値を示す数量句を伴えば共起可能であり、それは“多V”“早V”が潜在的に比較義をもつためであること。
- (5) A+V形式が動作動詞相当であるために比較構文の構文的意味である「程度や差の表示」と衝突するため、その衝突を解消するために具体的な数量の表示が必要であること。

これらの研究結果により、程度の高低を述べることと比較という概念が不可分であることや、現代中国語において数量表現が果たす役割を考え直す必要が生じた。このことは、現代中国語において「数量を示す」ことがどのような意味をもつのかという新たな問題意識につながっている。現代中国語において数量表現に用いられる量詞には、単に数量を示すのみではなく、事物を個体化、個別化する働きがあることは周知の事実である。形容詞に後置される数量句をこの観点から論じた研究は見られず、今後の研究計画としては、動詞に後置される動作量や時間量としての数量句と、形容詞に後置されて二者間の差を示す数量句とを関連付け、体系的に論じることを目指す。

また、程度補語については、本研究では“多”を用いた相対的程度性を示すもののみ検討し、“死了”“极了”のような絶対的程度性を示すものについては詳しく論じることができなかったが、これらの程度補語が“了”を伴うことについても、程度補語が表現機能上「程度が極まる」ことを表すものに限定されることとの関連から分析する準備が整っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 前田真砂美	4. 巻 6
2. 論文標題 差を表す A很多	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「立命館法学」別冊『ことばとそのひろがり（6）』島津幸子教授追悼論集	6. 最初と最後の頁 555-579
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前田真砂美	4. 巻 第21期
2. 論文標題 “比”構文における A+V と数量句	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代中国語研究	6. 最初と最後の頁 86-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 前田真砂美
2. 発表標題 動詞を伴う比較構文と数量フレーズの共起 “AV” と “V得A” の場合
3. 学会等名 第40回中国語文法研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田真砂美
2. 発表標題 “多V” “早V” と数量句
3. 学会等名 第44回中国語文法研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----